

11/20 Sat.

第242回 土曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SATURDAY MATINÉE SERIES No.242 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

11/21 Sun.

第242回 日曜マチネーシリーズ  
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演  
SUNDAY MATINÉE SERIES No.242 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮  
Associate Conductor & Creative Partner

ピアノ  
Piano

コンサートマスター  
Concertmaster

R. アルフテル  
R. HALFFTER

ガーシュイン  
GERSHWIN

[休憩]  
[Intermission]

ブルックナー  
BRUCKNER

鈴木優人 (指揮者/クリエイティブ・パートナー) -p.4  
MASATO SUZUKI

山下洋輔 -p.6  
YOSUKE YAMASHITA

長原幸太  
KOTA NAGAHARA

祝典序曲 [約7分] -p.8  
Festive Overture

ラプソディ・イン・ブルー [約16分] -p.9  
Rhapsody in Blue

交響曲 第4番〈ロマンティック〉 変ホ長調  
WAB 104 (1888年稿/コーストヴェット版) [約65分] -p.10  
Symphony No. 4 in E flat major, WAB 104 "Romantic"  
(Version 1888, Edited by B. Korstvedt)  
I. Ruhig bewegt (nur nicht schnell)  
II. Andante  
III. Scherzo: Bewegt – Trio: Gemächlich  
IV. Finale: Mäßig bewegt

※当初の発表から出演者と曲目の一部が変更されました。

11/26 Fri.

第647回 名曲シリーズ  
サントリーホール 19時開演  
POPULAR SERIES No.647 / Suntory Hall 19:00

指揮  
Conductor

ピアノ  
Piano

コンサートマスター  
Concertmaster

モーツァルト  
Mozart

[休憩]  
[Intermission]

ブルックナー  
BRUCKNER

マリオ・ヴェンツァーゴ -p.5  
MARIO VENZAGO

ゲルハルト・オピッツ -p.6  
GERHARD OPPITZ

林 悠介  
YUSUKE HAYASHI

ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K. 466 [約30分] -p.12  
Piano Concerto No. 20 in D minor, K. 466  
I. Allegro  
II. Romance  
III. Allegro assai

交響曲 第3番 二短調 WAB 103 〈ワーグナー〉  
(第3稿/ノヴァーク版) [約57分] -p.13  
Symphony No. 3 in D minor, WAB 103 "Wagner"  
(3rd version / Nowak edition)  
I. Mehr langsam, Misterioso  
II. Adagio, bewegt, quasi Andante  
III. Scherzo: Ziemlich schnell  
IV. Finale: Allegro

※当初の発表から出演者と曲目の一部が変更されました。

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京芸術劇場  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）  
独立行政法人日本芸術文化振興会

主催：読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団  
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）  
独立行政法人日本芸術文化振興会

11/20  
土曜マチネー

11/21  
日曜マチネー

Maestro

指揮

## 鈴木優人

(指揮者/クリエイティブ・パートナー)

MASATO SUZUKI,  
Associate Conductor & Creative Partner

### 新時代の革命児が描き出す 新たなブルックナー!



©読響

はちめんろっぴ  
八面六臂の活躍で音楽界の未来を切り開く気鋭。ガーシュインの名曲とブルックナーの傑作交響曲を組み合わせた、彩り鮮やかなプログラムを披露。オルガニストでもあるブルックナーの持つ音楽の構築性を読み解き、新たな作曲家像を築き上げる。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学および同大学院修了。オランダ・ハーグ王立音楽院修了。指揮者として国内外のオーケストラと共演するほか、鍵盤楽器奏者としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2018年にバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) の首席指揮者に就任。BCJとは15年にバッハ〈マタイ受難曲〉、17年にモンテヴェルディの歌劇〈ポッペアの戴冠〉を指揮して絶賛され、昨秋にはヘンデルの歌劇〈リナルド〉を上演し注目を浴びた。また、19年から世界的ヴィオラ奏者タメスティとのデュオでチェンバロを弾く「バッハ・プロジェクト」を開始し、ヴェルビエ音楽祭などに出演。

作曲家としても活躍するほか、13年から調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務めるなど、活動は多岐にわたる。NHK-FM「古楽の楽しみ」にレギュラー出演中。ホテル・オークラ音楽賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞。20年4月に読響の指揮者/クリエイティブ・パートナーに就任。コロナ禍による活動中止後の再開最初の演奏会や20年11月の《第603回定期演奏会》《第27回読響アンサンブル・シリーズ》などでの活躍が評価され、21年3月に第71回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞した。

指揮

## マリオ・ヴェンツァーゴ

MARIO VENZAGO, Conductor

### 33年ぶりの来日 衝撃のブルックナー



©Alberto Venzago

ブルックナー演奏で高い評価を得ているスイスの名匠が、昨年4月の公演中止を経て、念願の読響初登場。1988年にN響に客演以来、33年ぶりの来日を果たし、日本で初めてブルックナーの交響曲を披露する。

1948年チューリヒ生まれ。ウィーン国立音楽大学でハンス・スワロフスキーらに師事。ヴインタートゥール・ムジークコレギウム、ハイデルベルク市立劇場、プレーメン・ドイツ室内フィル、グラーツ歌劇場、バーゼル響、バスク国立管、インディアナポリス響、イェーテボリ響の首席指揮者や音楽監督などを歴任。2010年から14年までロイヤル・ノーザン・シンフォニアの首席指揮者を、2010年から21年夏までベルン響の常任指揮者・芸術監督を務めた。ベルリン・フィル、ベルリン放送響、ボストン響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、フランス国立放送フィル、ロンドン・フィルなど世界各地の楽団に客演している。オペラでは、バーゼル歌劇場、ベルリン・コーミッシェ・オーパーなどで活躍。

ベルク、ノーノ、グバイドゥーリナら近現代音楽を得意とし、数多くの録音をリリース。また、CPOレーベルからリリースされた、五つの楽団を振り分けたブルックナーの交響曲全集は、国際的に高い評価を受け、「史上最も刺激的で、そして示唆に富んだ、斬新なブルックナー」と評されるなど、日本でも話題を呼んだ。

11/26  
名曲

Maestro

11/20

土曜マチネー

11/21

日曜マチネー

Artist



©Akihiko Sonoda

ピアノ

## 山下洋輔

YOSUKE YAMASHITA, Piano

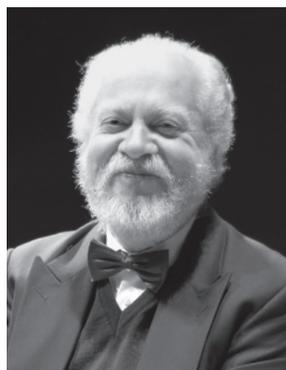
破天荒で革新的な演奏で日本ジャズ界を切り開いてきたピアニスト。1969年、山下洋輔トリオを結成、フリー・フォームのエネルギッシュな演奏でジャズ界に大きな衝撃を与える。国内外のジャズ・アーティストとはもとより、和太鼓や交響楽団との共演など活動の幅を広げる。88年山下洋輔ニューヨーク・トリオを結成、世界各国で演奏活動を展開。2016年にはウィーンのムジークフェラインにて、佐渡裕指揮のトーンキュンストラ管と〈ラプソディ・イン・ブルー〉を演奏し、話題を呼んだ。20年には最新ソロアルバム「クワイエット・メモリーズ」をリリース。1999年芸術選奨文部大臣賞、2003年紫綬褒章、12年旭日小綬章を受章。国立音楽大学招聘教授。多数の著書を持つエッセイストとしても知られる。読響とは、1985年以来2度目の共演。

11/26

名曲

Artist

ドイツ・ピアノ界の正統派を代表する演奏家。バイエルン州生まれ。パウル・バック、ヴィルヘルム・ケンプに師事。1977年、第2回アルトゥール・ルービンシュタイン・コンクールで第1位となり、一躍世界的に脚光を浴びる。翌年には、名門ドイツ・グラモフォンより最初のレコードをリリース。これまでに、ウィーン・フィル、ベルリン・フィルなど世界の著名な楽団や、ジュリーニ、マゼール、メータ、コリン・デイヴィス、サヴァリッシュらの指揮者と共演。とりわけムーティからの信頼は厚く、世界各地で共演を重ねている。これまでにBMG/RCAやヘンスラーから多くの録音をリリースし、高い評価を得ている。親日家でもあり、日本で最も人気のあるピアニストの一人である。読響とは、2013年以来になり、6度目の共演。



©HT / PCM

ピアノ

## ゲルハルト・オピッツ

GERHARD OPPITZ, Piano

11/20  
土曜マチネー

11/21  
日曜マチネー

Program Notes

## R. アルフテル 祝典序曲

ロドルフォ・アルフテル(1900~87)はマドリッドのプロイセン系の出自を持つ家庭に生まれ、シェーンベルクやドビュッシーの音楽に触発され独学で作曲をはじめた。銀行員として働きつつ、マニエル・デ・ファリヤからアドバイスを受けて創作を続け、1932年にはピアノ独奏を伴った管弦楽曲(協奏的序曲)が、また36年にはバレエ音楽(アルメリアのドン・リンド)が成功を収めるなど、作曲家の地歩を固めた。この時期、ガルシア・ロルカ、ダリ、バスケス・ディアスなどの芸術家・知識人との交流も深めている。

1939年、スペイン人民戦線政府がフランコの反乱軍に敗れると、アルフテルはメキシコに亡命し、国立音楽院教授に迎え入れられた。スペイン時代から評論活動も行っていたが、メキシコでも音楽雑誌の編集に携わり、また1946年に初演されたヴァイオリン協奏曲が注目を集めるなど、戦後は同国を代表する作曲家とみなされるようになる。1962年にスペインへの帰国が許可されて以降は、母国でも教鞭<sup>きょうべん</sup>を執り、以降は87年にメキシコ・シティで没するまで多くの栄誉に輝いた。ファリヤをはじめ、同時代のモダン音楽の語法を身に付け、複調や時には12音技法などの新しい技法にも大胆にチャレンジした。弟のエルネスト、甥のクリストバルもそれぞれ作曲家、指揮者として活躍している。

〈祝典序曲〉は1952年に作曲され、アルフテルに作曲を学んだ指揮者ルイス・エセラ・デ・ラ・フエンテが設立したベラス・アルテス室内管弦楽団(1951年設立)によって初演、フエンテに献呈された。弦に格調高いテーマが出されると、木管楽器がそれを引き継ぎ、舞曲的な色合いを加えつつ祝祭気分を高めていく。このテーマは反復されるが、素材を組み替え多彩な経過をたどっていく。管弦楽の色彩感を生かしつつ、エスニックな香りを新古典主義的な端正さへとまとめている。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1952年／初演：1953年5月25日／演奏時間：約7分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

## ガーシュイン ラブソディ・イン・ブルー

ジョージ・ガーシュイン(1898~1937)はロシア系ユダヤ人の移民の家庭に生まれた。15歳で楽譜出版社の試奏ピアニストの仕事につき、ジャズ・テイストの歌曲を作曲しはじめる。才能はすぐに開花し、1919年にはミュージカル・コメディ〈ラ・ラ・ルシル〉が、翌年には〈スワニー〉がヒットし、ガーシュインはたちまちポピュラー音楽界の寵児<sup>ちようじ</sup>となった。

ガーシュインはクラシック分野でもアメリカ的なものを模索していくが、その最初の、そして最も成功した作品が〈ラブソディ・イン・ブルー〉である。ある日、ジャズバンド界で人気を集めていたポール・ホワイトマンが「モダン音楽の実験」と題した演奏会を企画、そのためにガーシュインがジャズ協奏曲を作曲するという記事が新聞に出た。驚いたガーシュインはホワイトマンに連絡するが、押し切られてしまう。公演当日まで1か月ちょっと。ガーシュインが2台ピアノ用に作曲し、それをファーディ・グローフェがバンド用へと編曲する形で大急ぎで進められた(管弦楽編曲版もグローフェによる)。

曲はクラリネットが最低音からグリッサンドで上行して始まるが、ラグタイムのリズム、題名の由来となったブルーノート(アメリカ黒人音楽に特徴的な音律)に加え、随所にみられるジャズの奏法も印象的で、本作はクラシックとジャズを融合した「シンフォニック・ジャズ」の代表作とみなされている。

楽曲は都会の憂鬱<sup>けんそう</sup>や喧騒<sup>けんそう</sup>を思わせるフレーズが狂詩曲風に次々と現れ、その素材をピアノがカデンツァで大胆に展開する。一転して優雅でゆったりとした旋律がヴァイオリンに現れ、これを独奏ピアノが受け継ぎロマンティックな気分を高める。やがて素早くリズムミッドなパッセージが姿を現し、楽想を華麗なる技巧で膨らませると、それが呼び水となってオーケストラが主題を再現し曲を閉じる。

〈江藤光紀 音楽評論家〉

作曲：1924年／初演：1924年2月12日、ニューヨーク／演奏時間：約16分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン3、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、アルトサクソフォン2、テナーサクソフォン、ティンパニ、打楽器(小太鼓、サスペンデッド・シンバル、シンバル、グロッケンシュピール、トライアングル、大太鼓、銅鑼)、弦五部、独奏ピアノ

11/20  
土曜マチネー

11/21  
日曜マチネー

Program Notes

## ブルックナー

## 交響曲 第4番〈ロマンティック〉 変ホ長調 WAB 104 (1888年稿/コーストヴェット版)

アントン・ブルックナー (1824~96) がリンツの大聖堂オルガニストの職を辞してウィーンに出てくるのは1868年、44歳の時のことである。当時ブルックナーはウィーン音楽院の教授として、またオルガニストとして知られていたが、作曲家としても成功するために、1870年代に入ると交響曲の創作に没頭。年に一作というペースで精力的に筆を進め、72年には第2番、73年には第3番、さらに74年の頭から取りかかった第4番も11月には完成させている。

第4番はそれまでの5曲(番号のないものも含め)とは異なり長調で始まっており、個性的なスタイルが打ち出されただけでなく、自ら〈ロマンティック〉というタイトルをつけ、ある程度標題的な性格を持たせている(「夜明け」「シジュウカラのさえずり」「狩人たちの集い」といった描写的な内容を書簡などで知人に伝えている)。創作の転機<sup>あすか</sup>の作であるだけでなく、初演も大成功をおさめ、作曲家ブルックナーの名声を広めるのに大きく与った。

とはいえ、1881年に初演された〈ロマンティック〉は作曲当初の姿とはかなり異なっている。あくなき向上心に加え、演奏者の意見にも寄り添ったことから、ブルックナーの交響曲には様々な稿が存在するが、ここで〈ロマンティック〉の改訂の経緯を押さえておこう。ブルックナーは74年にひとたび曲を完成させた後、知人の音楽評論家を通じベルリンでの初演のチャンスをうかがうが、それがかなわなかったために78年に一回目の改訂を行った。さらに79年から80年にかけて終楽章をもう一度改訂し、これを改訂済みの第1~3楽章とともにひとまとまりとしたのが第2稿(1878/80年版)である。成功裏に終わった初演はこの稿に拠っていた。

その後、1888年にフェルディナント・レーヴェ、ヨーゼフ・シャルク、フランツ・シャルクが元となる稿を作り89年に出版されたのが、初版とか第3稿と呼ばれるものだ。上演ごとにブルックナーが施した変更や改訂は他にもあるが、大きくみると〈ロマンティック〉にはこの三つの稿がある。スケルツォ楽章を作り替えるなど第1稿と第2稿の違いは大きいですが、それに比べると第3稿への変更は部分的なカットやオーケストレーションの改変にとどまっている。

1936年に第2稿に基づくハース版が出版されるまで、初版/第3稿は〈ロマン

ティック〉の唯一の楽譜として約半世紀にわたり曲の普及に寄与した。当時は作曲者の意向は必ずしも不可侵ではなく、ブルックナーの交響曲も指揮者が自らの判断で改変したり、出版譜にも弟子の手が入っていたため、作曲家の意向を尊重した版が広まるにつれて初版は顧みられなくなっていった。とはいえ、ブルックナーが完全に納得していたかまでは定かでないものの、〈ロマンティック〉初版は本人のチェックを経ていることも事実である。この点を重く見て、初版を校訂しなおしたのが2004年に刊行されたコーストヴェット版である。版・稿の性格・歴史性を押さえつつ演奏者の解釈に耳を傾けるのも、ブルックナーを聴く楽しみの一つなのである。

**第1楽章** 静かに動きをもって(速すぎずに) 弦の静かなトレモロの中からホルンの第1主題が聴こえ(いわゆるブルックナー開始)、さらに2+3連符(ブルックナー・リズム)の流れるような旋律へ接続する。弦による優美な第2主題を挟んで、同じく2+3連符で下行する第3主題が金管で強奏される。この三つのテーマを中心に進む。

**第2楽章** アンダンテ 弱音器を付けた柔らかなリズムの上に、チェロが哀愁を秘めた主題を歌い出す。この主題はオーケストラ全体に広げられ複雑化されつつ繰り返される。その間に、清涼なコラールやヴィオラの味わい深い旋律などが挟まれて奥行きを作る。

**第3楽章** スケルツォ：動きをもって~トリオ：ゆっくりと ホルンが呼び交わして始まるこの楽章は狩りの描写だと作曲者自身が述べている。トリオはレントラーと呼ばれる舞曲の一種だが、狩りの合間の食事の際に演じられる踊りを表しているという。コーストヴェット版ではトリオの再現部が一部省略・短縮されている。

**第4楽章** フィナーレ：ほどよい動きをもって 第1楽章冒頭を想起させる下行音型がホルンとクラリネットに現れ、狩りのテーマなどを加えつつクレッシェンドし、主題を全楽器で劇的に総奏、さらに第1楽章第1主題に依拠しつつ歓喜を爆発させる。コーストヴェット版ではここでシンバルが響き渡る。

この後、短い主題を組み込みながら様々な技法を駆使して展開していく。コーストヴェット版では再現部の主題の総奏がカットされており、第3楽章も含めこの版は“後ろが軽い”のが特徴といえるだろう。 (江藤光紀 音楽評論家)

作曲：1874年(第1稿)/初演：1881年2月20日、ウィーン/演奏時間：約65分  
楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シンバル)、弦五部

## モーツァルト

## ピアノ協奏曲 第20番 二短調 K.466

1781年、ザルツブルク大司教コロレドと決別したヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)は、故郷を離れ、ウィーンでフリーランスの音楽家として活動を開始した。当時ウィーンでは、大規模な公開演奏会から貴族の館や裕福な市民の邸宅で開かれる私的なものまで、様々な演奏会が開かれていた。モーツァルトも、それらにピアニストとして出演し、また自ら演奏会を企画して自作を披露するなかで、音楽家としての地位を固め、名声を高めていった。その人気は、ウィーン移住から3年後の1784年に頂点に達した。例えば、同年3月のモーツァルトが主催した予約演奏会(新作披露のためにあらかじめ予約者を募り開催する)には、ウィーンの名だたる貴族や名士がずらりと名を連ねた。なかでもオーケストラを相手にピアニストが名技を披露するピアノ協奏曲の人気は高く、ウィーン時代の10年間に17曲のピアノ協奏曲を完成させ、とりわけ後半の8曲(第20番~第27番)は、個性的な名曲ばかりとなった。

第20番は、1785年2月11日にモーツァルト主催の予約演奏会で初演された。前日に完成したため、ウィーンで演奏を聴いた父親レオポルトの書簡によると、写譜が間に合わず、終楽章を事前に通して弾く余裕もなかったようだ。しかもモーツァルトの協奏曲では非常に珍しい短調の作品。シンコペーションで始まる**第1楽章**(アレグロ、二短調、4/4拍子)の陰鬱な開始、穏やかな**第2楽章**(ロマンス、変口長調、2/2拍子)の中間部(ト短調)で突然現れる嵐のような音型、**第3楽章**(アレグロ・アツサイ、二短調、2/2拍子)の交響曲を思わせるがっちりとした構成など、従来の協奏曲がもつ華やかで社交的な性格を飛び越え、激しい感情表現の場となった。聴衆は驚いたはずだが、5日後には再演され、デモーニッシュな要素も情熱の表現として高く評価された。なお、モーツァルトは、この協奏曲のためのカデンツァ(第1、第3楽章)を書き残していない。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1785年／初演：1785年2月11日、ウィーン／演奏時間：約30分  
楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

## ブルックナー

## 交響曲 第3番 二短調 WAB 103 〈ワーグナー〉(第3稿／ノヴァーク版)

アントン・ブルックナー(1824~96)は、1873年の9月に第2番と作曲中の第3番の二つの交響曲を携えて、バイロイトのワーグナーのもとを訪ねた。当時、祝祭劇場の建設で多忙だったワーグナーは、楽譜に目を通すことに乗り気でなかったが、第3番冒頭のトランペット独奏の旋律に興味をもち、ブルックナーが作品の献呈を申し出ると快諾の返事をくれた。同年の12月31日に全曲完成後、専門の写譜家によって清書された総譜は、1874年5月9日付でワーグナーに献呈された。

いわばワーグナーお墨付きといえる作品であるが、1874年と翌年にパート譜を準備してウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に提出したところ、2回とも演奏を拒否された。そのためこの第1稿は、作曲家の生前に初演されることも、楽譜が出版されることもなかった。ブルックナーは、大半の交響曲で改訂を重ねているが、第3番も例外ではなく、1877年に全体的大幅な短縮を行い、楽想やオーケストレーションを変更するなどして第2稿を完成させた。どうにか同年末にウィーンの楽友協会の演奏会で初演されることになったが、作曲家の良き理解者だった指揮者ヘルベックが急逝したため、ブルックナー自身が指揮した。だが、練習不足だったため、音楽評論家ハンスリックを中心とした反対派の野次にさらされた(聴衆のなかに若き日のマーラーもいた)。その惨憺たる結果にブルックナーは相当落ち込んだが、幸いなことに出版社から打診があり、翌年に総譜とパート譜が出版された。その後、ウィーンの楽壇におけるブルックナーの地位は少しずつ高まっていき、1881年の交響曲第7番の輝かしい成功などによって名声は確立され、第3番の再演が待たれた。そして周囲の勧めで再改訂を行い(マーラーは反対したようだ)、89年に第3稿が完成した。ここでは第2稿で追加したスケルツォ楽章(第3楽章)のコーダが削除され、終楽章の再現部が大幅に縮小された。

本日は、その第3稿による演奏である。楽曲全体はすっきり整理され、凝縮された密度の濃い作品となっている。第1稿にはワーグナーの作品(〈トリスタンとイゾルデ〉〈ワルキューレ〉〈タンホイザー〉など)からの引用も含まれたが、多くは改訂を重ねるなかで削除された。また、この交響曲から本格的に現れるブルックナー・リズム(2+3、3+2)が、改訂のたびに強調されていった。

**第1楽章** より遅く、神秘的に、二短調、2/2拍子 弦楽器の弱音の響きから、トランペット独奏が浮かび上がる。堂々とした第1主題は、ブルックナー休止（総休止）をはさみながら高まり、へ長調の穏やかな第2主題は、ブルックナー・リズムによる。管楽器のコラール風の第3主題は、途中でトランペットが新しい動機を加える。再現部ではブルックナー・リズムが強調され、コーダはティンパニが轟く。

**第2楽章** アダージョ、動きをもって、クワジ・アンダンテ、変ホ長調、4/4拍子 改訂のたびに速度標語が微妙に変化し、楽章規模も縮小された。穏やかな第1主題がヴァイオリンで歌われ、しばらくすると3/4拍子となり、ヴィオラが憧れに満ちた第2主題を奏でる。静かで神秘的な楽想を経て、再び第2主題がヴィオラ、次いでヴァイオリンに現れる。第1主題が木管楽器で再現され、力強いファンファーレが輝き、祈りのような音楽で終結する。

**第3楽章** スケルツォ、かなり速く、二短調、3/4拍子 弦楽器の旋回する音型とピッツィカートを組み合わせた開始から、全楽器による力強い主題が現れる。歌謡的な中間部をはさみ繰り返される。トリオ（イ長調）では素朴な旋律が歌われる。

**第4楽章** フィナーレ、アレグロ、二短調、2/2拍子 力強く突き進む第1主題、緩やかなテンポで表情豊かな第2主題、管楽器が高らかに響く第3主題が提示される。再現部は、第3稿で第1主題と第3主題が削除されたため、縮小された第2主題から始まる。最後は、第1楽章の冒頭主題が金管楽器で輝かしく再現されて力強く結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1872～73年（第1稿）、1877年（第2稿）、1888～89年（第3稿）／初演：1877年12月16日、ウィーン（第2稿）、1890年12月21日、ウィーン（第3稿）／演奏時間：約57分  
楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部